第一回シンポジウムを終えて

大阪樟蔭女子大学サイクルプロジェクト取組責任者　川上正浩

「なんとかここまで…」というのが正直な感想である。

学生のジェネリック・スキルを育てる，というサイクルプロジェクトを実質的にスタートさせて半年，後ろを振り返る間もなく走り続けてきた感がある。今回のシンポジウムは，そうした中，一度これまでの活動を総括して，後ろを振り返り，まさにサイクルプロジェクトが目指しているような「フィードバックにつながる循環」を生み出すのに良い機会であったと思う。

振り返ってみての反省点もいくつかあった。学生によるジェネリックスキルの自己評価は，半年間の取組の結果，統計的にも有意な形で上昇してはいたし，このことは我々にとっても非常に喜ばしいことであった。しかしながら，そうしたジェネリックスキルの上昇は，サイクルプロジェクトの取組の成果，というよりは個々の先生方の教育によるものであり，現在本学に，あるいは本プロジェクトに求められているのは，プロジェクトとして提案できる，具体的なジェネリックスキル教育の『方法論』であることを痛感させられた。

また，このシンポジウムを終えた後で，幾人かの先生から，「今日のシンポジウムを聴かせてもらって，やっとこのプロジェクトが目指していることがわかりました」というような感想を頂いた。これは，このシンポジウムの成果としては，喜ぶべきことであるが，逆に言えば，これまでの半年間，プロジェクトの取組責任者としての役割をいかに果たし得て来なかったかが反省された。プロジェクトを前に進めることに焦るあまり，全学的なコンセンサスを得る前に，「とにかく前へ。」と突っ走ってしまっていたのかもしれない。

従来から，サイクルプロジェクトは，学生のための取組であると同時に教員のための取組でもあると考えてきた。社会に出て行く学生がジェネリックスキルを身につけていることは，彼女らにとって大きな意味を持つ。しかしながらそれ以前に，大学における教育場面で彼女らが自律的に学んでいくためにも，ジェネリックスキルは強力な武器となる。そして学生がジェネリックスキルを身につけていることは，教員の側にとっても，たとえば授業を十全に運営する（これは，「気持ちよく運営する」と言い換えても良いかもしれない）ための要件である。このように考えれば，学生のジェネリックスキルを育てることは，我々教員が“気持ちよく”授業をするための営みでもあり，学生の，そして教員のためのプロジェクトであるはずである。

まだまだ問題は山積みであるが，本学学生が胸を張って社会に出て行けるよう，そして，本学教員が気持ちよく教室に向かえるよう，全学的なコンセンサスを得ながらサイクルプロジェクトを進めていきたいと思う。今後とも，本学のサイクルプロジェクトに，ご支援，ご協力，ご指導をいただきますよう，よろしくお願いいたします。